

【緑地を楽しむ本】

人新世の「資本論」

斎藤幸平 集英社新書

気候変動に拍車がかかっているとひしひしと実感する今、マイバッグを持ち歩いていても、「こんなじゃ全然間に合わない！」と焦っています。そんな時読んだ本書の冒頭には「SDGsは大衆のアヘンだ」とあり、引き込まれました。

気候変動問題の解決策として「脱成長コミュニティズム」を掲げて、39万部のベストセラーとなった本書には胸に落ちるところがたくさんありました。

特に共感したのが「コモン（共）」という考え方で、近年進むマルクス再解釈の鍵となる概念のひとつだそうです。コモンとは、社会的に人々に共有され、管理されるべき富のことを指します。

「水や土壌のような自然環境、電力や交通機関といった社会的インフラ、教育や医療といった社会制度、これらを、社会全体にとって共通の財産として、国家のルールや市場的基準に任

せずに、社会的に管理・運営していこう」と述べられています。

これを読んで、平和台の緑地活動こそ、コモンの共同管理であり、万人の富を守る活動であると気づきました。自然と触れ合ったり手仕事をしたりしていると癒やされるという実感は個人的なものだと思っていましたが、実はそうではない。その先にどんな社会があったら皆が幸せになれるのか考え行動することで、社会はよりよく変わるのだとわかりました。

脱成長とは経済の停滞とは違う、「ラディカルな潤沢さ」であると本書にはあります。

地球環境問題はグローバル化の中でますます複雑になっていき、無力感に囚われがちでしたが、あきらめずに足元から行動していこうと力づけられた本でした。

（蔦谷）